

劍門の道中にて微雨に遇う（陸游）

勤王大義太分明 報國丹心期七生  
傳家一脈遺風在 誓學名聲弟與兄

衣上の征塵酒痕を雜う

解説 この詩は作者が日露の役に出征するに際し、その覚悟を家兄に述べたもの。

遠遊 処として 消魂せざるは無し

語釈 ※丹心Ⅱまごころ。※期七生Ⅱ楠木正成が湊川の戦に敗れて弟正季と自刀するとき「七度人間に生まれて朝敵を滅ぼさん」と誓った言葉に基づく。※伝家一脈Ⅱ広瀬氏は南朝の忠臣菊池氏の後裔であるから、伝家の字を用いた。

此の身合に是れ 詩人なるべきや 未や

通釈 臣として君のために忠節を尽くすという大義は、

細雨 驢に騎つて 劍門に入る

なはだ明白であつて、国に報いようとするわれわれの真心は、かの楠木正成・正季兄弟のごとく、七たびこの世に人間として生まれかえつて逆賊を絏ぼうとする覚悟そのものである。わが家は名譽ある忠臣・菊池氏の子孫であるので、このように君のために命を捧げようとする忠節は、祖先伝来の遺風である。願わくはこのたびも先祖に劣らぬ武勲を立て、兄弟誓つて、わが家の名聲をあげたいものである。